

### 「アメリカ移民の話」5

この連載は奇数月に隔月で行なっています。「アメリカ移民の話」4が二〇一三年五月、七月、九月は別の内容にし、十一月は都合で休みました。ここで再び「アメリカ移民の話」にもどります。この内容はまだ続きますが、間に他のテーマを入れて断続的になることがあります。ご承知ください。過去の連載については、須恵町のホームページで広報紙の閲覧ができます。町立図書館では連載のスクラップを置いてあります。ご利用ください。

なお、福岡県から、糟屋郡から、多くの移民が太平洋を越えました。

須恵町域からの移民については、従来知られていなかったもので、ご存じの方は情報をお寄せ願います。

手紙・写真・記念碑・新聞記事など、眠っている資料はないでしょうか。

写真1は「海外同胞長逝者 招魂碑」です。外務大臣広田弘毅書。福岡市南区「平尾霊園」内にあります。元は東公園にありましたが、県庁移転にともない、昭和五十五年（一九八〇）に移されました。広田弘毅は鍛冶町（現在の福岡市中央区天神三丁目）の出身。昭和十一年から十二年に総理大臣、その前後の時期に外務大臣を務めています。「招魂」は神道式に慰霊することを言います。福岡県の海外移民のための慰霊碑です。

さて、安河内喜三は須恵町新原の原田家の出で、粕屋町酒殿の安河内家の婿養子になります。渡米したのは明治三十九年（一九〇六）、数え年三十四歳の時です。実弟原田真太郎も同行しますので、確実に真太郎は須恵町からの海外移民です。

喜三は、困難に立ち向かう勇気を持ち、才覚もあり、働き者でした。厳しい農業労働に耐え、二年後

には蓄えた金で四〇エーカー（一六ヘクタール）の農地を借ります。それまでにコシヨウ栽培の研究をしていて、迷わずコシヨウの種を蒔きました。それが後にコシヨウ王と呼ばれる端緒で、日本人移民の中に後に続く者も出ました。ところが一時帰国して、



写真1

大正四年（一九一五）に再渡米した時、日本人移民の排斥や世界的な不況によって農場・加工工場を失い、借金の抵当に入った土地だけしか残っていません。借金の抵当に入った土地だけしか残っていません。借金の抵当に入った土地だけしか残っていません。借金の抵当に入った土地だけしか残っていません。

第一次世界大戦（一九一四〜一八）が終結し、アメリカの景気も好転しました。この頃、漸く経営再建に成功しました。

写真2〜5は喜三一家の家族写真です。写真2はスナップ、写真3〜5はスタジオでの記念写真です。背広の上下・チョッキ（ベスト）・ネクタイ・革靴

姿の男性。女性はいずれも洋装で帽子をかぶっています。大正期の農村では考えられないような「ハイカラ」な姿です。戦後も、昭和三十年代に高度経済成長を経るまでの日本で、このような「ハイカラ」な生活は望むべくもありません。

一家はできるだけアメリカの生活に溶け込もうとしています。少し奥目で口ひげを蓄えた喜三の表情も自信に満ちています。しかし、それはアメリカ在住の日本人が、やがて大嵐に見舞われる前の、つかの間の幸せでしかなかったのです。



弟泰介単身渡米 父を助く。1918年（大正7年）

写真4



1910年頃独立し 自信を持ち始めた頃か？（左二人目が父喜三）

写真2



1915年（大正四年）母トモ渡米記念スナップ

写真3



1920年（大正9年）あらたに泰介を迎へた喜三一家と眞太郎一家。当時の在米一族全員。

写真5

※写真2〜5『父と子 日米に別れて生きた九十年』より